

川村 杜山（かわむら・とざん）

1、プロフィール

明治 42 年、碓ヶ関村にて満 20 才の若さで服毒自殺をした歌人。残した歌は少ないが、「蘭菊会」や「東奥日報」で活躍し、本県短歌界黎明期の注目すべき歌人の一人である。

<生没>

1889(明治 22)年5月 18 日 ~ 1909(明治 42)年9月 29 日

<代表作>

『川村杜山歌集』

<青森との関わり>

中津軽郡富田村 90 番地(現弘前市御幸町)に生まれる。病院に勤務しながら短歌を作ったが、若くして亡くなった。

2、作家解説

歌人。明治 22 年、現弘前市御幸町の鍛冶屋川村卯之吉の4男、末子として生まれる。本名助次郎。37 年に弘前高等小学校卒業後、弘前衛戍病院看護人となったが文芸を好み、川柳や俳句、短歌を作る。初めは華村、白露、小春ほかの号を用いた。

明治 38 年ころの県歌壇は鳴海要吉の「吾が胸の底の茲」や大塚甲山らの作品が、「東奥日報」をにぎわし、やがて五所川原に「蘭菊会」が結成されるが、その頃杜山はそれらの作品に刺激されて精力的に短歌を作りはじめた。そして 39 年には甲山に作品を送って添削指導を受け、40 年には質量ともに飛躍的に伸びた作品を、「中学生」「文章世界」「スバル」などの中央誌に投稿した。

その後、短期間ではあるが梅原歯科医院の薬局生になったが、自宅にこもっては読書と短歌制作に専念するなど、文芸に傾倒する毎日であった。

明治 41 年、同じ土手町の広田病院薬局生となる。当時のことを知る人の言によれば性格は温厚であるがひたむきで、まじめに一直線に走るタイプだったという。

同 42 年 1 月、「蘭菊会」に入会し、同誌と「東奥日報」に多くの作品を発表した。とめどなく湧き出る詩心を一挙にほとばしらせた観がある。憧憬と不安、恍惚と傷心、懐疑と安堵の波が、20 才の青年の胸に寄せては返す様子が表われた作品群で、県文壇に感銘を与えた。

同 42 年 9 月 29 日、恋に破れた杜山は南津軽郡碓ヶ関村柴田旅館にてストリキニーネにより自殺をした。「東奥日報」は直ちに木村横斜の序文を付した遺稿や甲山の追悼文を揚げ、「蘭菊会」はその第 10 号を追悼号とし、その死をいたみ才能を惜しんだ。

昭和 47 年、小山内時雄の手により、『川村杜山歌集』（「郷土作家研究」第 9 号）がまとめられた。

3、資料紹介

○『川村杜山歌集』

雑誌

1972(昭和 47)年 5 月 1 日

205mm × 140mm

「郷土作家研究」第 9 号に、小山内時雄が編集し、資料編として掲載した。明治 40 年から 42 年までの詠草 165 首と、俳句・川柳などの作品若干、さらに参考資料として、大塚甲山の追悼文を附している。